

エチオピアの宦官の洗礼

使徒言行録 8 : 26 - 40

2021/05/02 上野聖ヨハネ教会

今日の使徒言行録に登場したのはフィリポという伝道者、最初の教会の指導者のひとりです。イエスさまの 12 弟子の中にもフィリポがいましたが、それとは別の人物です。そのフィリポに主の天使が語りかけました。

「さて、主の天使はフィリポに、『ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け』と言った。そこは寂しい道である。フィリポはすぐ出かけて行った。」使徒言行録 8 : 26 - 27

天使に命じられて、フィリポは遠く山道を急いで下っていきます。すると前方を馬車で行く人が目に入りました。馬車の様子やその人の服装からしてエチオピア人です。相当な地位のある人と思われます。

「折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、帰る途中であった。」 8:27 - 28

アフリカのエチオピアの女王に仕える高官が、エルサレムに礼拝に来て帰り道だということです。なぜこの人がはるか遠いエチオピアからエルサレムの礼拝に来ていたのでしょうか。

非常に珍しいことですが、ひとつの例をわたしたちは知っています。30 数年前、ユダのベツレヘムにイエスがお生まれになったとき、遠い東の国から博士たちがはるばる旅してきました。

遠い東の国から来た博士たちと、遠い南の国から来たエチオピアの高官との間には——わたしの想像ですが——共通点があります。それはいずれも、真理を求めていた、ということです。魂が渇いていたのです。

ただこのまま老いて死んでいくことはできない。どうしても知りたい、どうしても出会いたい真理があるはずなのです。博士たちはエルサレムにそれを尋ね、エルサレムではなくベツレヘムにそれを見出して、喜びに溢れて帰って行きました。

エチオピアの高官もエルサレムに来た。しかし求めるものは見出せずに帰っていきます。遠路はるばる来たのに、得られなかった。それでも彼は真理を、自分がそれによって生きてそれによって死ぬことのできる真理、ほんとうのものをなお求めているのです。

なぜそう思えるか、というと、彼は馬車に揺られつつ、聖書を声に出して朗読していたからです。

彼はエルサレムで、ヘブライ語かギリシア語訳の旧約聖書の巻物を手に入れたのでしょう。それも預言者イザヤの巻物。イエスさまが故郷ナザレの会堂礼拝で、開いて朗読されたのもイザヤの巻物でした。

彼にとっては外国語の聖書の巻物を、おそらくは流暢にはではなく、たどたどしく、しかしそのぶん一語一語大切に発音して、その意味を汲み取ろうとしていました。

「彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた」(8:28)と書かれています。

そのとき、主の霊がフィリポに呼びかけました。

「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ。」8:29

フィリポに最初に呼びかけて彼を出発させたのは主の天使でした。今度は「“霊”がフィリポに」と書かれています。霊とは主の霊。もっとはっきり言えば、復活されたイエスご自身です。目に見えないけれども復活のイエスが、フィリポにはっきりと呼びかけられた。

「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ。」

「フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、『読んでいることがお分かりになりますか』と言った。宦官は、『手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう』と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。」8:30 - 31

見ず知らずの外国人同士です。けれども、わからない聖書、わかりたい聖書の言葉をめぐって二人は出会い、共に進んでいきます。

「彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。

『彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。

毛を刈る者の前で黙している小羊のように、口を開かない。

卑しめられて、その裁きも行われなかった。』」8:32 - 33

預言者イザヤの巻物に記されているその人。口を開かないその人。卑しめられて不当にも命を取り去られると書かれているその人のことが、宦官には気になって仕方がない。

「宦官はフィリポに言った。『どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。』」8:34

「宦官は」と書いてあります。彼はエチオピアの女王の全財産の管理を任されているほどの高官です。力がある。高い地位と強力な権限を持っています。彼の命令に人は服従します。しかし彼は知っています。自分が軽んじられていることを。いくら地位があり、お金があり、力があつたとしても、人は自分を無言のうちに卑しめている。彼が宦官だからです。人からだけではなくて、自分自身、決して満たされない喪失感がある。けれどもそ

れは人には言えないし言っても仕方がない。

その彼が今、心の底から言うのです。「教えてください。この人はだれなのか」。

「そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。」8:35

フィリポが、この聖書の箇所からこの宦官に告げ知らせたのはイエスのことです。卑しめられて命を取り去られた小羊のようなイエスこそが、あなたの救いであり命であると。エチオピアの宦官が聞いたのは、このイエスがわたしとともにおられ、わたしを引き受け、わたしを生かしてくださる方である、ということです。イエスのことを聞いたのです。

「道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。『ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。』そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。」

8:36 - 38

洗礼を受けてよかった。人がわたしのことをあがめようとけなそうと、わたしが元気であろうと弱っていようと、永遠にわたしはキリストのもの。ひとたびキリストのものとされた人は、どんなことがあっても揺らぐことのない人生の土台を与えられたのです。わたしに人生の目標と支えを与えられた——これが洗礼です。

「彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。」8:39

かつて救い主を見出して喜びに溢れて帰って行った博士たちと同じく、彼も喜びに溢れて帰って行きます。

フィリポに代わって、わたしのために死にわたしのために復活されたイエスが一緒に、彼の道を行ってください。わたしたちにとっても、それは同じです。

祈ります。

神さま、復活の主の霊をわたしたちすべての上に注いでください。洗礼をとおして、復活の主がわたしたちの人生の道を共に行ってくださることを確かにしてくださった。その喜びを深く味わわせてください。主のみ名によってお願いいたします。アーメン

(司祭 井田 泉)